

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
TEL 0463-59-4111 (内線 2200)

昨今の教職課程履修者の就職事情

関口昌秀

湘南ひらつかキャンパスの今年の教職課程履修者は434名、そのうち経営学部が78名。教育実習に行った学生は35名、そのうち経営学部は7名。実習生の2割以上が科目等履修生であった。経営学部は7名中の1名が科目履だった。

教員就職者は学生数の1%というのが全学的平均だが、湘南ひらつかキャンパスは2%というところである。昨年は全学で50名就職したが、その半分の25名がひらつかで、経営学部卒業生は4名であった。内訳は、私立高校の社会科1名、私立中学体育1名、小学校2名。

このように教職をはじめても実習までゆく学生は少ない。教職をやめていく理由はさまざま考えられる。本学では教育実習に出るまでに多くの条件が課されており、たとえば、社会科の学生なら2年修了までに漢字検定準2級を取らなければならない。経営学部の場合、コースによっては社会科の免許に必要な科目とコース科目との重なりが少なく、44単位という履修制限の中に入りきらない、ましてや社会科に加えて情報の免許まではとても考えられないという事情もあるようである。また、社会科の採用試験は理科や数学と比べて難しく、受験倍率が高いということもあるだろう。

教育実習に出られるほど頑張ってきた経営の学生は、それなりに優秀であり、教員になるために何年もかけなくても現役でふつうに就職できる実力がある。これまで何人か首席で卒業した学生も教職にい

たが、彼らの場合は4月時点で就職内定を得て、それから教育実習に出ていたようである。

科目履になってまで教職課程に残る学生は、ほんとに教員になりたい学生なのだが、しかし残念ながら、社会科の場合、年数をかければ教員になれるというわけにもいかない。社会科での就職者は4年ぶりだが、彼の場合、大学院修了後、運よく私立高校の非常勤講師となり、その2年後専任になれた。しかし私立でも、非常勤から専任にはなれないのが原則である。彼は社会科教員としての実力と運を兼ね備えていたということだろう。

卒業後、他大学の科目履となって保健体育の免許を取得し、体育の教員となったケースは、やはり特異というべきだろう。経営学部の卒業生で教員になる最大のルートは、卒業後、玉川大学や明星大学の通信課程で小学校の2種免許（短大相当）を取得して、小学校の教員となる道である。卒業生は中学校社会の1種免許を持っているので、小学校の2種免許なら1年間で取得可能なのである。

卒業後の進路はさまざまである。7月に実施される教員採用試験に落ちても、秋に市職員の採用試験を実施する自治体もあるから、そこを受験する学生もいる。来年もう1度チャレンジする学生もいる。進路を少し変更しスクールカウンセラーをめざして、臨床心理士資格の取れる大学院進学を考えはじめた学生もいる。総じて、教職課程履修者の行く末は、大卒の就職統計からは見えてこないというのが実情である。

(所員/せきぐち・まさひで)

ガウディ研究の拠点

鳥居徳敏

「想定外」。今回の東日本大震災直後、頻繁に聞かされ、しばしば批判の対象にもなってきた言葉である。残念ながら、肉体的にも時間的にも限定されたわれわれの能力では、すべてを網羅して結論に導くことはできない。とは言え、研究には限定的な基本資料が存在する。カタルーニャ（スペイン）の建築家アントニ・ガウディ（1852-1926）といった歴史上の人物を対象とするような場合、まずは家族や末裔が所有する個人的な資料、出生・教育・兵役・婚姻・死亡など公的機関の所蔵する資料、建築家という職業からは、一連の作品群、それに関わる事務所や建設会社、あるいは公的機関やオーナーたちの所有する資料などのいわゆる一次資料。次に新聞や雑誌などに掲載された作品紹介、作品論や作家論などの二次的な資料。これら一次資料とか、生前の二次資料とかであるなら、未だ限定的で、完璧とはいわないまでも、おおよそ網羅することは可能であろう。問題はこれら以外の資料である。歴史や時代の影響とか、作品の由緒来歴や造形のルーツとかなどをテーマにするなら、資料は無尽蔵、決して尽きることはない。さらに、作品が世界遺産に登録されているガウディの場合、その研究書や論文は膨大な数に登り、1973年の時点で既に文献目録の単行本が出版される程であり、現在でもその勢いは加速するのみで、留まるところを知らない。

ガウディは生涯独身を通し子孫を残さず、自邸を建設資金としてサグラダ・ファミリア聖堂に寄贈したため、所蔵品などすべての資料は同聖堂のガウディ事務所に移され、1930年代初めには、聖堂敷地内に「ガウディ博物館」の建設計画も持ち上がった。しかしながら、スペインの内戦（1936-39）が勃発し、計画は頓挫、ガウディの所蔵品を含み、あらゆる書類や図面は焼失し、石膏模型類の資料も破壊されるに至る。

内戦終結後、ガウディの遺した備蓄基金が温存されていたため、サグラダ・ファミリアの修復と建設の続行が可能になった。ただし、第二次世界大戦から終戦後にかけてはあらゆる意味で困窮の時代が続き、ガウディ建築を評価できるような

状況にはなかった。1950年代に入ると、世紀末芸術のアール・ヌーヴォーの再評価が始まり、ガウディ建築も脚光を浴びる。生誕百周年の1952年にはガウディの所属したバルセロナのサン・リュック美術サークル内に「ガウディ友の会」が発足する。初代会長は建築家のパトロンであったグエイの孫、会の目的はガウディ建築の保存と流布、および研究であり、その最初の成果が56年のガウディ展であった。同じ1956年、母校のカタルーニャ工科大学バルセロナ建築学部内に省令により「ガウディ記念講座」が創設され、また1958年には、前記「友の会」からさらに専門的な「ガウディ研究センター」が生まれる。いずれもガウディ建築の普及と研究を目的としながら、統合されることはなかった。最初のガウディ書（1929）著者ラフルス（1889-1965）は「記念講座」初代教授、サグラダ・ファミリアの五代目建築家で同聖堂研究書（1929）著者プッチ（1891-1987）は「友の会」会員、同会員でガウディ会話（1951）と大著の研究書（1965）著者マルティネイ（1888-1973）は「センター」初代会長であり、生前のガウディを知るこれらの研究者たちには組織を統合し、将来のガウディ研究の基礎を盤石にしようとする意識は見られなかった。

1968年、弱冠38歳のバサゴダが「ガウディ記念講座」教授に就任する。また、「友の会」メンバーたちの高齢化が進み、同会長をも兼任。「ガウディ研究センター」の方はバルセロナ建築家協会と連携し国際会議や講演会を組織したものの、会長マルティネイの他界とともに消滅。結果的には、公の機関である「記念講座」のみが存続。資料の発掘と収集に対するバサゴダの献身的な努力により、他所で偶然発見された資料なども同講座に集まるようになり、文字通りガウディ研究の拠点がここに誕生する。1970年代以降になると、世界各地で開催されるガウディ展はこの講座の協力なしに不可能にもなった。

ガウディのパトロンの自邸フィンカ・グエイがバルセロナ大学所有になっていたのだが、その厩舎（1884-87）を修復（1973-77）して「記念講座」本部が入り、図面や写真を含むあらゆる資料が整

研究余滴

備されていた。1969年にはガウディのほぼ全作品が国のモニュメント(国宝・重要文化財に相当)に指定されていたから、国宝クラスの建物が本部になったことになる。1970年代後半、筆者もこの講座には随分と通った。教授は午後2時に帰宅するのを常としていたから、それ以降は筆者がこの国宝を独り占めにすることができた。

2000年、バサゴダは70歳で退官した。しかしながら、世紀末に始まった教育改革(ボローニャ・プロセス)により、「記念講座」本来の建築史講座そのものが消滅しており、後継教授の公募はなかった。そのため、教授の要望とこれまでの貢献により「管理人」という特別の肩書でバサゴダはそのまま居残ることになる。この異常事態は永遠には続かず、2008年には所有者バルセロナ大学の退去要請に従い、講座は元来の所属機関カタルーニャ工科大学バルセロナ建築学部の施設に全資料ともども移動させられた。翌2009年、既に退官して何の権利もないバサゴダ教授は講座からついに追い出されることになる。この誠に後味の悪い結末で、折角収集された文献・資料が再び散逸することにもなった。現在、施設は閉鎖され、資料の閲覧は不可能な状態にある。

こうなるであろうことは誰もが予測し、「記念

講座」に代わる別の機関の出現が望まれていた。そのひとつの動きが「ガウディ研究センター」再建(1994)である。この再建には建築家磯崎新のバルセロナ事務所代表丹下敏明氏の尽力があった。筆者も7人の理事の一人として協力したのだが、9年継続した国際会議も2002年を最後に活動が途絶えた。同年ガウディ生誕の150周年を機に、今度は「ガウディ友の会」が再建された。これにはサグラダ・ファミリアの彫刻家の一人として知られる外尾悦郎氏が貢献し、筆者にも協力要請がなされた。現在バサゴダの唯一の肩書がこの会長である。既に高齢で足腰が弱っているため行動力がなく、「友の会」も期待されるほどには機能していない。問題は、「研究センター」の場合同様、物理的な本部の不在にある。資金力不足で本部施設を整備できないため、資料の収集や保管、そして閲覧といった便宜が図れないのだ。資金力の豊かさで群を抜いているのがサグラダ・ファミリアであり、現在、どれほど建設を急いでも年間5億円の余剰金が出るほどである。聖堂の地階には博物館が常設されているのだから、ここにガウディ研究の拠点を創設し、基本資料を常に閲覧できるようにしたい。可能なら、その日本支部の創設も望まれる。(所員/ とりい・とくとし)

国際経営研究所主催第2回「わたしたちの提案」
作文応募状況とテーマ別分野特性

地域別小中高別分布は以下のとおりであった(地域は“あいうえお”順)。

地域	学校			合計
	小	中	高等	
大磯		5		5
茅ヶ崎	36			36
中井	1			1
平塚	26	6		32
藤沢	1	8	1	10
合計	64	19	1	84

応募作文全体のテーマ別分布特性は、以下のとおり。ただし1つの提案文で、複数の提案があるので、テーマ数は作本文数とは一致していない。

- ・ 自然関連(エコ、生きものを含む) : 34
- ・ 地域コミュニケーション関連(あいさつ、ふれあい、笑顔、外国人受け入れを含む)

- ・ ゴミ関連 : 19
- ・ 公共施設関連(交通手段を含む) : 16
- ・ 商店街関連(大型ショッピングモール、雑貨屋、よろず屋、駄菓子屋、などを含む) : 12
- ・ 安全関連(暮らし、犯罪、交通事故、空気のごち、などを含む) : 10
- ・ 街おこし関連(自慢作り、特産品の地域間連結、オンリーワンショップ、マイホームタウン、体験モノ作り、などを含む) : 7
- ・ SF風未来社会 : 1

計 8分野、132提案

大きな特徴は、①環境関連が1位と2位を占めていること、②笑顔、あいさつなどの現代社会がかかえる底流問題が2位を占めたこと、③商店街関連で原点回帰ともいえるユニークな提案がみられたこと、などである。重く受け止めておかなければならない宿題を、未来の地域経営者たちからいただいた。

国経営研究所主催シンポジウム 開催さる

当初3月に予定していたシンポジウムが東北大震災関連の影響を受けて延期となっていた。このたび小中高校生の「わたしたちの提案」と連動させる形で、下記のとおり開催の運びとなった。

- ・ 統一テーマ：地域企業—住民—子供たち—大学を結ぶ集合智の試み
- ・ 日時：2011年11月12日(土)
午前10:00～17:00
- ・ 場所：平塚商工会議所

プログラムは午前の部と午後の部の2部構成からなる。

午前の部 10:00～12:00

小中高校生「わたしたちの提案」—公募作文入賞者による発表、講評、表彰

審査は、所員の協力をいただき、1作文につき2名の審査員によって厳正かつ公正に行われた。またその結果は、複数の常任委員によって共通評価基準にもとづき最終調整された。

午後の部 13:00～17:00

講演、シンポジウム—モノづくり、コトづくり、そして智慧興し

講演の部 13:00～15:20

4名の方による講演
株式会社アマダ 情報戦略推進室 室長
石川 紀夫
相模石油株式会社 代表取締役社長
小泉 光一郎
元神奈川大学 名誉教授

清水 敏允

北海道大学 大学院工学研究院 助教

須田 孝徳

シンポジウムの部 15:30～17:00

上記4名の講演者に加えて、以下3名の地元経営者が討論に参加する。

株式会社山川機械製作所

代表取締役社長 小川 敦

株式会社タシロ 代表取締役社長

田城 裕司

株式会社シンクフォー 代表取締役

山下 祐

なお、司会進行は、サロン de WINE の企画担当・大道寺 孝子が、シンポジウムのモデレータは、株式会社ダイショウ代表取締役石塚 裕が、それぞれ担当する。講演者や討論者たちは、いずれも当研究所とかかわりをもっている方々である。地域に密着した研究所との関係が問われる企画でもある。

今回は特に、地域の経営に携わる“未来の経営者たち”との連動が大きな特徴になっている。他大学の動きをみても、大学主催の“子供大学”が実際に活動を開始している。大きなくりで、集合智(collective wisdom) のきっかけづくりになることが期待されよう。

☆ 編集後記 ☆

本年も「わたしたちの提案」に関し、小中高校生からたくさんの作文が寄せられた。第2回の今年は3・11の大震災を反映して、防災への対応を町づくりに望む意見が多かった。

子供たちにとっても、震災の現実は大いなる衝撃であったことがうかがわれる。(S・H)